

開催報告

第65回全国家の光大会

～対話でつくろう地域の未来 みんなでつなごう協同のこころ～

第65回全国家の光大会を2月14日、神奈川県・パシフィコ横浜国立大ホールで開催し、愛読者代表やJ A教育文化活動関係者など約2,000名が参加しました。

全国家の光大会前日には、東・中・西日本の3地区に分かれて都道府県代表体験発表大会が行われ、「記事活用の部」「普及・文化活動の部」に、都道府県代表者合わせて56名が臨みました。それぞれがJ A・地域に根ざした活動を発表しました。

そして、翌日の全国家の光大会では、都道府県代表体験発表大会で選出された9名それぞれが会場で発表しました。審査の結果、「記事活用の部」は北海道J Aしべちの岩本博美さんが志村源太郎記念賞（発表内容は『家の光』6月号に掲載）に、「普及・文化活動の部」は滋賀県J Aグリーン近江の福田真由美さんが全国農業協同組合中央会会長賞に輝きました。

ここでは、「普及・文化活動の部」で家の光協会会長特別賞に選ばれた3人の発表を紹介します。



- 家の光協会会長特別賞
- 全国農業協同組合中央会会長賞

活動の先にある笑顔のために



滋賀県
ふくだまゆみ
福田真由美(46)

所属JA JAグリーン近江
所属部署 管理部 総務課
組合員数 23,658名(うち正組合員8,089名)

「いつもこころにGreen Way」。これは、私たちJAグリーン近江役職員全員の合言葉です。Green Wayとは、JAグリーン近江の役職員としてとるべき行動や考え方を表したもので、仕事にたいして働く意義や生きがいを感じ、一体となって事業や運動に取り組むことができます。全役職員が持っている「Way手帳」最終ページには、2014年に制定された「教育文化活動基本方針」が示されています。そこには、教育文化活動は一部署ではなく全部署で行い、活動を通じて、組合員、地域住民と「新しい親密な関係性」を築く必要があると定義されています。

それでは、当JAの教育文化活動実施体系をご説明いたします。

教育文化活動を実施するにあたり、毎事業年度初めに、全部署で教育文化活動の4つの領域に沿った「行動計画」を策定します。14の支店では支店長が、6つの営農振興センターでは「教育文化担当者」が中心となって活動を計画・実施し、総務課が統括をおこなっています。

これまで、各支店が自由に教育文化活動を実施できるよう予算を配分したり、活動を掲載した支店だよりの表彰制度を設けるなど、活動の士気を高めてきましたが、新型コロナウイルスの影響により、活動が自粛され、教育文化活動の方向性を見失っていきました。

そこで、2023年度の「行動計画」策定にさいし、女性部・支店ふれあい委員のみなさまのお力をお借りして、活動の見直しを図りました。1月には「女性部と支店職員の懇話会」「ふれあい委員のつどい」を、3月には「教育文化活動セミナー」を開催しました。

役職員と女性部・支店ふれあい委員のみなさまにも参画いただき、組合員・地域住民の声を反映させた「行動計画」を、実際にその場で策定していただきました。さらに年間を通じて実施した教育文化活動をポイント化し、表彰する仕組みも作りました。

ここから私が提案し実行した『家の光』を活用した教育文化活動の一部を3つご紹介いたします。

まず、1つめ、表彰のポイント対象にもなっている、職員による「家の光記事活用グループ」の結成です。

当JAでは役職員が『家の光』を購読していますが、なかなか『家の光』をじっくり読む時間が作れずにいるようでした。

そこで、まず新入職員に『家の光』を紹介しようと、女性部と新入職員の『家の光』料理教室を実施してみました。新入職員が『家の光』記事から食べてみたい料理を選んで、女性部の方々といっしょに調理をしてもらいました。

最初は緊張していた新入職員も、できあがった料理を食べるころにはすっかり打ち解け、楽しい時間を過ごすことができました。この活動を各支店に広げられないだろうか？ と考え、全支店で「職員による家の光記事活用グループ」を結成し、『家の光』を活用した活動を実施してもらうことにしました。

グループ活動の一環として、オクラを育て、オクラカレーを作る支店や、管内の農事組合法人へ、そば打ち体験をしに行く支店など、幅広い活動をしていただいています。

朝礼で『家の光』を輪読している支店では、ある日、当番の共済渉外担当職員が、2023年6月号から「教えて！ フレミズ調査室」など3つの記事を紹介。今回はこの3つの記事で「怒る」がテーマになっていたという説明の後に、同僚にたいして「この1年で怒ったことはないですか？」と投げかけたところ、いつの間にかファシリテーションが始まり、なんと終了時には他の職員から拍手が巻き起こりました。

支店長からは「連絡事項の伝達が主だった朝礼から、『家の光』の記事活用を通じて、職員が主体となったよい朝礼となった。感謝しかありません」と感想をいただきました。

次に2つめの活動をご紹介します。普及運動を表彰ポイント対象とし、組合員をはじめ、地域のみなさまに、もっと『家の光』を読んでもいただくための普及強化活動を行いました。

まず普及率と購読中止部数から支店ごとの目標部数を設定。前納取りまとめ月

には、担当常務、家の光協会担当者、私の3人で全支店を巡回して、『家の光』は J Aからお伝えすべき情報を、職員に代わって発信し続けてくれる媒体であるといった普及する目的や思いを伝え、日次で実績を管理。イントラネットを活用し、役職員で実績を共有しました。

営農振興センター職員と支店職員との連携推進、地域の食堂や美容室、公民館、介護福祉施設等、地域住民が集まる場所への推進などを行い、全体で165部の推進目標にたいし185部の増部、J A全体では1,222部の購読、普及率は17パーセントとなりました。活動を通じて潜在的な購読希望者がたくさんいることに気づきました。

また、J Aで開催する相続セミナーや公開協同組合塾など各種セミナーで『家の光』を活用したり、年2回「『家の光』愛読者のつどい」を開催したりと、購読者の相互交流を図り、「購読していてよかった!」と思ってもらえる場所づくりを心がけています。

3つめは、『ちゃぐりん』を活用した取り組みです。子どもたちを対象にしたイベントで、『ちゃぐりん』を配布したところ、「ぼくこの本ほしかってん。どうやったら家で読めるの?」と質問がきました。子どもたちに大人気の『ちゃぐりん』ですが、そのよさが親御さんに伝わっていないことがわかりました。

そこで、7月から9月の3か月間、子どもさんのいる家庭に渉外担当者が1人3軒訪問し、計264冊の『ちゃぐりん』をお届けする取り組みを始めました。

また、2007年より、管内全小学校33校への『ちゃぐりん』寄贈もおこなっています。例年は5年生全クラスへ毎月『ちゃぐりん』の寄贈をおこなっているのですが、今年度は、夏休みの課題として「第46回『ちゃぐりん』読書感想文」にお取り組みいただきたい旨を、各支店長から管内全小学校へ依頼しました。

結果、全小学校でお取り組みいただくことになり、夏休み前に2,085冊の『ちゃぐりん』8月号を寄贈しました。親御さんのご理解もあり、読書感想文は404作品集まりました。

農家への応援メッセージや、『ちゃぐりん』にたいする熱い思いなど、子どもたちの純粋な目で書かれた作品ばかりで、感動しました。応募作品の中からは、全国で最優秀賞を受賞する作品もありました。

当J Aでもご協力いただいた学校や親御さん、応募した児童の思いに応えようと、独自の読書感想文コンクールを実施。『ちゃぐりん』の前身『こどもの光』で「キテレッツ大百科」が連載されていたことから、当J Aではとくに農家への応援メッセージ性の強い作品に「キテレッツ賞」を贈呈することにしました。

いただいた作品は、今後当J A広報誌や、職場内報、農家向け資料などへの掲載を通じ、組合員・地域住民にも読んでいただき、子どもたちに農業振興の一翼

を担っていただこうと考えています。

以上、当JAで取り組んでいる活動の一部をお伝えいたしました。私どもの経営理念であります「人と自然とのかかわりをたいせつにし、食を守り、地域に愛されるJAグリーン近江をめざす」ためにも、『家の光』や『ちゃぐりん』をただお届けするだけでなく、開いて、読んで、活用していただくためのきっかけづくりを実施してまいります。

JAに集うみんなが笑顔になれるよう、共に実践していきましょう！

普及・文化活動の部

●家の光協会会長特別賞

教育文化部



千葉県
かさい えりこ
笠井 絵里子 (52)

所属JA JAいちかわ
所属部署 教育文化部
組合員数 24,725名(うち正組合員4,621名)

第62回全国家の光大会にて「家の光文化賞」を受賞いたしました。これまでも教育文化活動はおこなってきましたが、ほんものの日本一になるためにさらなる教育文化活動がだいじだと役職員が気づき、令和4年4月に、「相談部」から全国で初めて「教育文化部」へ部署名を変えました。

JAいちかわは千葉県の北西部にあり、市川市、船橋市、浦安市、柏市の北部に位置しています。私の所属する「教育文化部」は、「生命(い)・地域(ち)・環境(か)・和(わ)をたいせつにし、協同活動を通じて地域社会に貢献する」という理念のもと、組合員相互そして組合員(生産者)と地域住民をつなぐ専門部署となります。

まずは「つなぐ、つなげる」代表的な取り組みを紹介いたします。

5月の2日間、組合員感謝の集い「由紀さおり・坂本冬美コンサート」を東京国際フォーラムで11,500名を招待し開催しました。

3月、設立60周年記念招待会「中村美律子歌謡ショー」を帝国ホテルで組合員1,000名を招待し開催しました。

最後に『河内おとこ節』に合わせて、女性部員を誘って私たちが踊り始めると、あれよあれよと踊りの輪が広がって会場全体が一体感のある忘れられない光景となりました。

また春の桜まつり、夏の柏地区納涼大会や梨まつり、秋の田中まつりや感謝祭と、季節ごとのお祭りを年5回開催。地域の子どもたちに農業へ関心を持ってもらうため、『ちゃぐりん』食農クイズを使った〇×クイズ大会をメインステージで行いました。そのほか、女性部と年金友の会の事務局も務めています。

これらを合計すると年125日、3日に1回は行事を開催しており、これを私たち「教育文化部」は部長、次長、ふれあい課5名、広報課2名でこなしています。「ふれあい課」はふれあい活動を通じた地域社会の活性化に努め、「広報課」はその「教育文化活動」を主要なメディアから発信しています。

このように多忙な日々を送っていますが、自己改革3か年計画「『農業振興応援団(准組合員)5,000人拡大運動』に貢献したい！ どうしたら増やせるか？」と思いたち、教育文化部で知恵を出し合った新企画「JA女性大学ふれあいカレッジ」を役員へ提案したところ、賛同いただき開催することになりました。

対象者はJAいちかわと無縁の地域女性。市川市・船橋市・柏市の広報誌に募集記事を掲載しました。初めての試みでしたが、募集人数60名を大きく上回る130名の申し込みがありました。7月の開校式では、JAらしさを出すために『家の光』2014年12月号の記事を活用し「米袋のエコバッグ」作りを行いました。

2回めはJAいちかわの取り組みを少しでも理解してもらえるよう特産品のナシとお米の収穫期に、選果場と大型精米機を見学し、昼食で新米のお弁当を召しあがっていただきました。同じ管内でも農地の少ない地区からの参加者は、利根川河川敷に広がるお米の圃場に感動していました。

3回めは、2月にホテルでのテーブルマナー教室を開催しました。閉校式では『家の光』2020年5月号「第70回家の光文化賞受賞JAレポート」の掲載記事を使ってJAいちかわを説明し、より知っていただき、58名の受講生が准組合員となりました。

次に准組合員に入った特典として、設立60周年記念日帰り旅行を行いました。旅行中に、取引のあるシャトレーゼの工場見学や『ちゃぐりん』2022年11月号「市川のナシ物語」を見てもらってJAいちかわの農業や農産物について説明しました。

続く特典として「JAカルチャー教室」を開催しました。年3回対面で配布する准組合員広報紙「JAいちかわ通信」に募集記事を掲載しました。

2月に開催したみそ造り教室では船橋地区女性部員が講師を務め、新たな准組合員と交流を図ることにより女性部への新規加入につなげました。

J A いちかわ女性部は3地区で活動しています。4月に開催している各地区の女性部通常総会では、家の光大会を同時に開催し、年間の事業計画のなかで『家の光』記事活用をどうとり入れるかを部員同士で話し合います。私が担当する船橋地区女性部では、令和5年7月に『家の光』2021年9月号別冊付録「絶品！生米パン」を活用し、親子料理教室を行いました。

令和元年11月には船橋市と農地における防災訓練を開催し、『家の光』2019年9月号「お母ちゃんのすごい防災術」のなかにある「お湯ポチャレシピ」を活用しました。このような取り組みは「家の光三誌」の特集記事で頻繁に紹介いただいています。

市内小学生が市川市の農業について学べるよう、記事が掲載されている『ちゃぐりん』2023年9月号、10月号合わせて7,300冊を市内小学校へ寄贈しました。ちなみに9月号掲載の「小島よしおの産地へGO！GO！」では、私が「トマトのミネストローネ」を紹介しています。

最近では『地上』2024年2月号に今野組合長と千葉工業大学の古田さんによる農業とAIに関する会談が掲載されましたのでご覧いただければ幸いです。

令和5年4月から毎月、地元ケーブルテレビJ：COMの『地場野菜まるごと!! 使い切りエコクッキング』へ3地区女性部の持ち回りで出演しています。そのレシピを考えるさいには家の光料理カードを参考にしています。

こうした活動を通じて着実に「農業振興応援団」は増加しました。

そして『家の光』を紹介し続けた結果、第70回家の光文化賞を受賞以降、准組合員が5,865名増加しました。3地区の女性部は部員が51名(20パーセント弱)増加しました。『家の光』年間購読部数が1,853冊増加しました。まさに地域の方々との女性部の架け橋となった「教育文化部」とそのきっかけを与えてくれた『家の光』による成果のたまものです。そんな教育文化部にいる私は毎日がめまぐるしいです。

ときには女性部員とともに野菜を使い切るレシピを考案して発信したり、ときにはお祭りで地域の方々といっしょになって踊ったり、ときにはシックなスーツで歌謡ショーの司会を務め、ときにはどしゃぶりの雨の中、60キログラムのテントを担ぎ、地域の農業を盛り上げ、「つなぐ、つなげる」活動をいつもみなで考え、汗まみれになろうが、化粧が落ちようが、なりふりかまわずがんばる最強の教育文化部を私は誇りに思います。

そしてこれからも組合員・地域の方々とのふれあいをたいせつに、架け橋とな

れるよう活動してまいります。

最後に、今日発表する機会をつくってくれた家の光協会みなさまに感謝申し上げます。またなんでも相談しあえる部であり、それをつないでくれる上司、そしてそれをかなえてくれる今野組合長へ感謝いたします。

普及・文化活動の部

●家の光協会会長特別賞

生活指導員として…… その先のつながり



熊本県
やまぐち ともみ
山口友美 (44)

所属JA JAれいほく
所属部署 生活福祉課
組合員数 1,904名(うち正組合員673名)

苓北町は、九州のおへそ熊本県の西部、天草諸島の北西部にあり、西は天草灘を望む、美しい海に囲まれた町です。わがJAれいほくは、令和5年現在、正組合員673名、准組合員1,231名の計1,904名が所属しています。おもにレタスやミカン、米、仔牛の飼育が盛んです。4地区からなる女性部は111名、フレッシュミズは18名の計129名です。

私は、別の業種から7年前、JAれいほくに中途入組しました。職員になったのをきっかけに、当時の生活指導課長から『家の光』を購読しないかと相談があり、購読が始まりました。初めは『家の光』という誌名がしっくりこず、不思議な気持ちだったのを覚えています。それからすぐ生活福祉課に異動することになり、1年後、生活指導員養成研修に参加しました。

カリキュラムには『家の光』についての講義などもあり、回を重ねるごとに理解し、研修会も楽しくなり、無事に生活指導員の養成講座が終了し、翌年生活指導員になりました。

女性部の担当が務まるのか不安でしたが、当時の女性部長がいろいろなことを

教えてくださり、またまわりの女性部の方にも優しく迎えてもらい、思っていた不安が徐々に消え去ろうとしていた矢先、新型コロナウイルスが猛威を振るい始めました。

いままでふつうに行われていた活動がまったくできなくなってしまいました。いろいろな思いが頭の中を駆けめぐりましたが、なにもできないままあっという間に1年が過ぎてしまいました。

しばらくして少しずつ活動が再開されたころ、『家の光』で「家活」というワードを目にするようになりました。『「家活」ってなんだろう?』と思っていたとき、生活指導員研修会があり「家活」について勉強する機会がありました。「家活」でなにかできないかと思い、新人時代から担当をしていたフレミズの部長に相談しました。コロナが発生する前のフレミズの活動は、おもに子どもといっしょに活動することが多かったので、コロナ感染防止のため、極力集まらないようにしていました。そこで『家の光』に載っていた全国の女性組織の事例のコロナ禍での工夫を参考に共同購入の商品研修と併せ、外出もあまりできないなか、家の中で過ごしている子どもたちと楽しく料理してもらいたく、エコープマーク品の「もちもちパンミックス」を使ったピザ作りを計画しました。「フレッシュミズ通信」に商品紹介と子どもといっしょに楽しめるレシピを載せ、「もちもちパンミックス」をフレミズ役員さんに配布してもらいました。

さっそく、子どもといっしょに作られた部員さんから「子どもと作ったよ。生地が餅みたいでとてもおいしかった」とうれしい言葉を聞くことができました。次は、「女性部だより」を作成してみようと思い、私自身が家でよく作っていた「おからドーナツ」のレシピを載せ、また『家の光』の読みどころを併せて書いてみました。

実際にレシピのドーナツを作った方からは「おいしかった」との声もあり、掲載していたエコープマーク品を購入してもらえましたが、想像していたほど、読みどころの反応をもらうことができず、いろいろと反省しました。

当JAでは、組合員さんとのふれあいをたいせつにしており、『家の光』は生活福祉課で一軒一軒配達をしています。一軒ずつ配達をすると2時間以上かかりますが、世間話をしたり、「お茶ば飲んでいかんね」と言っていたりします。

私が担当する地区では、『家の光』を毎月楽しみにしてくださっている方がたくさんいらっしゃいます。先日、今年90歳になる方が「私は60歳から『家の光』の購読を始めた」とおっしゃっていました。

また別の方は「今月の表紙はイケメンさん?」と聞かれ「今月は〇〇さんですよ」と答えると「あらっ、私大好き」と言われます。その方も『家の光』を毎月楽

しみに読んでいます。本を読むのが好きだし、農協のことや料理や野菜のこと、いろんなことが書いてあって他の雑誌を読むよりいいです」と言われ、話が弾みます。

また、JAの職員から『ちゃぐりん』を譲り受けたことがきっかけだったそうですが、子どもたちに読ませたいと言われ、学童保育の先生にも購読してもらっています。学童のみなさんも『ちゃぐりん』の読者のページに図画などを書いて応募し、毎月自分たちの名前が載っていないかと探すのを楽しみにしていると先生から笑顔で教えてもらいました。

それがきっかけとなり、フレミズ部員の子どもさんが『ちゃぐりん』を購読しています。「とてもいい雑誌で食農教育にもなり、漫画本を買うよりいい」と言われます。こんな話は、実際に購読している人と話してみないとわかりません。

「耕うん機を探している」や「金融本店に行きたい」「タマネギ苗の注文は頼めるか」などいろんな問い合わせがあり、その場で各課に連絡して情報をつなぎます。高齢の方が多く、交通の便も悪いため、「すぐに対応してもらえらうらしい」「よかった」などみなさんから安心の声をいただきます。

JAれいほくには、今でもふれあい第一の昔ながらの農協がいろいろなところに残っているのです。

しかし、組合員・職員の購読者のなかには、「積ん読」の人もいます。初めのころの私のように『家の光』に戸惑いを覚えている方もいらっしゃるのが課題です。創刊当時の状況とちがい、インターネットをはじめさまざまな情報収集のツールが選べるなか、読んでみようと思えば袋を開けて手に取っていただくために読みどころをはじめ、なにが担当としてできるか模索しています。

そんななか、女性部のリーダー学習会や町内の女性の方を対象にした「いきいきライフセミナー」を開催しています。この「いきいきライフセミナー」は、平成22年から農村女性の営農生活の充実・発展を目的に始まりました。そのなかでは『家の光』に掲載されている記事を取り入れています。

いままでは講師を招いていましたが、コロナを機に自分が講師になって、いきいきライフセミナーやリーダー学習会を開催するために『家の光』を熟読しました。受講している人に少しでもわかりやすくするために、料理や手芸は実際に作り、ポイントになりそうなところを説明。また身近に感じてもらえるよう、共同購入の商品や見慣れている商品を提案しました。

最近の女性部対象のリーダー学習会では、生米パン作りの紹介、災害食について、睡眠についてなどの説明を行いました。終了後、参加された女性部のみなさんの反応は好評で、災害食の紹介で提案したホワイトツナ缶は、いまでは女性部の方に根強い人気です。

いきいきライフセミナーでは、2022年9月号「みつろうラップ」の記事活用で、キットを使い、みつろうラップ作りを実施しました。初めてチャレンジする人が多く、みつろうも多く入っていたので、「家でも作りたい」と話されています。

また、農協が運営するコインランドリーには、洗濯の時間を有効活用してもらうため、「家の光図書コーナー」を作り、『家の光』はもちろん「家の光図書」を設置しています。

女性部員数がコロナや高齢化を理由に毎年減っています。それに比例して『家の光』の購読部数も減りつつありますが、なんとか現状を維持しています。女性部では昭和60年から続く「食と農を守るふるさとの味交換会」や、平成12年から始まった海岸清掃などに、SDGsが広まるずっと前から行政や地元企業と協力して取り組んでいます。また令和4年にはフレミズの要望でAコープでの野菜の直売を始め、フレミズ部員も増加しました。

先輩たちが築きあげた活動が私を通じ、次世代へつながるよう、地域住民の方にも地域活動を通じて「家活」を広める活動を積極的におこなっていきます。

